

1 開会あいさつ

- ・岡山県教育庁生涯学習課長 中本正行

2 あいさつ

- ・岡山県社会教育委員の会議 議長 濱田栄夫

3 紹介

- ・委員の紹介

4 説明

平成26年度主要事業の概要について

- ・生涯学習課 ・義務教育課 ・生徒指導推進室 ・保健体育課 ・人権教育課

一括説明 生涯学習課長

質疑応答

委員 子どもの安全について県教委としてどう対処しているか。

生涯学習課長 保健体育課を中心に学校安全の観点から市町村教委へ通知・通達により指導している。

保健体育課総括参事

県内の全市町村、全県立学校に、これまでの安全の取組についてもう一度点検し、子どもへの指導を徹底するように通達している。くらし安全安心課とも連携して、地域の防犯ボランティアの協力も仰いで、子どもが立ち寄り寄るところに気をつけるよう協力要請をしている

委員 長期宿泊体験活動について、使用施設や3泊4日の意義等詳しい説明を。

義務教育課長 3泊4日が効果がある、との国の研究結果がある。岡山県の現状では1泊2日が多い。教員の研修や施設との打合せを含めた3泊4日への移行の研究が必要と考えており、

今

年度は、国立吉備青少年自然の家の施設を用いてモデルの開発を進めている。全校実

施

となるとキャパシティの問題もあるので、公民館や廃校の活用も今後検討。

委員 3泊4日を実施した後のフォローアップについてどう考えているか。

義務教育課長 国立吉備が開発した効果を測定するツールやQUテストの活用により、学級集団のまと

ま

り等を分析することを考えている。

委員 個々の成長のプロセスをどう見るかも大事にしてほしい。

委員 子ども達の集団づくりの力が弱くなっているのかもしれない。

委員 対象学年と、3泊4日実施の教師の負担感についてはどうか。

- 義務教育課長 対象学年は小4～6年だが5年生が多い。終日安全面に配慮をする必要があるので教師だ
けでは手が足りない。ボランティアの参加や緊急時のために看護師が帯同するなどの
対応
が考えられる。
- 委員 従来の海・山の学校を充実させる方向で考えるのはどうか。
- 義務教育課長 単に既存のものを廃止して新たなものを加えるということではなく、海・山の学校等、
すでに実施しているものについて内容の充実を図る、泊数を増やすなどの方向は考えら
れる。
- 委員 スクールソーシャルワーカーを活用した行動連携推進事業だが、子どもの6人に1人は
貧困といわれ格差が広がる中で、さらに拡充の必要があるのではないか。
- 生徒指導推進室総括副参事
平成25年度から前年度比で10倍以上の予算で25名のスクールソーシャルワーカー
を配置し、県下を12ブロックに分け複数で対応している。
- 委員 中学生の職場体験であるチャレンジワーク推進事業にかかる経費とは何か。
4日間は長いのではないか。4日でない補助がないのか？
不登校傾向の子も参加しやすい仕組みづくりを望む。
- 義務教育課長 経費はバス代や、物品破損等の保険代など。補助率は（3日間－3割補助）（4日間－
5割補助）としている。職場体験の成果が上がるのは4日間との研究成果があるが、
事業所の負担もあるので3日間とする案を協議中。

5 協議

(1) 平成26年度の研究課題の方向性と今後の予定について

事務局より説明

平成22年から25年まで、主に【地域からの学校教育活動への支援】について研究
が深められ、学校・家庭・地域の連携が進んでいること、中学生は人の役に立ちたい
気持ちはあるが、地域の行事にあまり多くの子が参加しているわけではない様子、地
域において大人と子どもの出番づくりを進めるというおかやま子ども応援事業の取組
の重点はまだ立ち遅れているということから、新しい研究テーマの方向性として、こ
れまでの【地域による子どもへの支援】という流れだけでなく、子ども達が地域へ参
画し貢献していくという方向性で考え、【若者の社会参画】を根底に据えたテーマを、
社会教育委員の会議の研究課題においても御審議いただければと考えている。

委員 平成26年度おかやま子ども応援事業実施方針に示されている目指す姿として『地域が
子どもを元気にし、元気な子どもが地域を活性化する』とあるが、これまでは「地域
が子どもを元気にする」ための支援が進んできたので、これからは「元気な子どもが
地域を活性化する」の方向性も考えると、双方向の取組が生まれて有効だと思う。佐
賀県で市民性を育む教育が提唱されており『出番・役割・承認』とのスローガンがあ

るがこれに通じる。対象とする若者の範囲や、参画のとらえ方など検討の余地はあるとして【若者の社会参画】という方向性はよいと考える。

委員 こうして研究してまとめたものが、県教育委員会の施策にとってどういう面で役に立つか、どういうふうに活かされていくのか。

生涯学習課長 地域に広め、地域連携を促進するために研究成果を普及することが目的

委員 この会議は研究機関なのか

生涯学習課長 その機能も持っている。

委員 施策にどう反映されるかの見通しは。

生涯学習課長 研究成果を浸透させることが各市町の施策に反映される。

委員 研究のまとめはどう配付されるのか

事務局 行政、学校へ配付。行政担当、学校の地域連携担当、地域コーディネーター研修で活用。

委員 おかやま子ども応援推進委員会とはどういう組織か

生涯学習課長 おかやま子ども応援事業を推進するための組織。

委員 提案された方向性が漠然としている。社会教育委員の役割を考えても、もっと焦点化した、たとえば放課後子ども教室でどういう支援をすればよいかや、遊びを通じての学び等を示せばよいのではないか。

生涯学習課長 子どもの出番づくりとはそういう内容も内包されていると考える。

委員 社会教育委員の役割として身体を通して遊ぶことが出来る環境作りをこれから討議していただきたい。

委員 研究とは政策に反映されて初めて成果があると思う。そういうプロセスも考慮してもらいたい。また、研究のまとめを配るだけでなく、実際に行動する大人の姿を見せる事も大切。

現場の先生の声も聴きたい。先生は何を悩んでいるか、どうするか一緒に考えたい。

生涯学習課副課長

本会議が提言を出し、教育委員会が施策に反映させるのが本来の流れ。反映できる部分とできない部分はある。また、提言や研究のまとめについては、配るだけでなく研修や現場において説明したり指導助言にも活用している。先生の声については、本会議には本日は欠席だが先生の委員もおり、また専門部会で研究を進める中で先生やコーディネーターの声も聴き取り、研究に反映させている。人づくり・まちづくり・生涯学習社会の実現という大きなところに向かって、その時々課題を焦点化し研究している。今回は、若者が地域に出て人のつながりをつくったり、まちを元気にすることにつながるということで研究の方向性の提案をさせていただいている。

委員 『地域が子どもを元気にする』ことの成果があったから次の方向性に進むのだろう。

『元気な子どもが地域を活性化する』の方向性をどうすれば実現できるかの提案だが、様々な活動を展開している団体や組織についてよく知ってもらうことが、参加する人々の

安心感と信頼を生む。それを県が、目に見える形にして示してくればより信頼が得

られ、

出番づくりを進めることにつながる。

委員 提言が政策に繋がるというアウトプットもだが、この会が学習する組織になっているかという点も大事。子ども応援事業の個々の取組を我々が俯瞰して見て、学習と研究を通してグラウンドデザインを描いていく。それぞれの地域でがんばっている取組を俯瞰する立場の我々にとって研究は大事と考える。

委員 『若者の社会参画』という範囲を広げて子どもだけでなく若い保護者への意識付けも含めて研究を深めていきたいと考える。また、この会議は施策決定の会ではないので、提言が直接は政策につながらないこともあるだろうが、研究をしていくのが我々社会教育委員の立場であるだろうし、我々自身が社会教育に関してスタンスを広げ、自らが資質を高めていきながら情報発信をしていくことが大事だろうと考える。

委員 データから見た事業成果の検討という観点から見ると、おかやま子ども応援のそれぞれの取組数が増えているというデータだけでなく、たとえばある市町村内で80%の学校で支援本部ができています。それが90%になったとするとその市町村の保護者にも成果が見える。またアンケート結果においては『自分にはいいところがあると思う』という項目に「思わない」「あまり思わない」と答える子が、いろいろな人と関わる中で認められて、そう答える子が減ったということなら成果が上がったといえるし、ゲーム時間で言えば、他に有意義なことでやることができ、4時間以上平日にゲームをやる子が減ったということになれば成果があったと言えるだろう。アンケートの最多回答帯も気になるが、そういう極端な子がどう変わったかを見るのも研究の成果の見方だろう。

研究テーマで言えば、若い保護者も含めて、という御意見があったが、子どもが参加する中でその子どもの社会関係資本が向上し、子どもを引率する保護者の社会関係資本も向上する中で、その地域における家庭の役割が高まるといった方向も、研究テーマあるいはサブテーマとして考えられる。

委員 2年前に地域連携担当が位置づけられたのはこの会議の提言が施策に反映されたもの。社会参画の仕方を子どもが選ぶことができる仕組みを大人がつくってあげればいいが、むしろ壊してきた面がある。高齢化社会を迎えているが、社会資本を次世代に引き継いでいってもらいたい。そういう、子どもが社会参画しやすい社会をつくるという意味を含めて、『若者の社会参画』というテーマを設定したい。

委員 県の教育の問題がいろいろある中で、社会教育の立場から、今なぜこのテーマを取り扱うことが妥当なのかという説明をしていただきたい。このテーマは切り口や見る角度によって現代的な課題ともなるし、県民の負託に応えるものにもなる。

生涯学習課副課長

社会教育の役割として、地域の教育力を上げていくことが重要。これまでの取組で子ども応援事業は拡充している。地域と子どもが離れているのでこれをなんとかする仕組みづくりが進んでいるということ。これも進めていくのだが、今後は、子どもが参画することで地域から認められる。社会的承認を受ける。それが今の教育的な課題—学力低下や問題行動を根底のところから解決するひとつになる。それが提案された研

究テーマの方向性だと考える。

委員 人の結びつきが弱くなっていることや、若者の背後に保護者の問題もあることを踏まえつつ、若者の社会参画をキーワードに研究を進めていくことでよいか。

委員 なぜ岡山県の子どもの学力向上に『出番・役割・承認』が意義があるのかを考えると、学力向上の根っこにあるのは授業規律や授業技術があり、もう一方で学ぶ意欲は実用志向、役に立つから学ぶ意欲が湧くということがある。子どもが社会の中でできることがあって、その延長線上でやりたいことが見つかるとう勉強に向かいやすくなる。そのできることに向かう機会を大人が増やしてあげられれば、社会教育の立場として、直接的にはないが、今の問題を解決するのに役立つのではないかと考える。

委員 若者の社会参画というと漠然としているため、放課後の支援方法等もっと絞った提言をすると現場の参考になるかと考える。

委員 ひとつに絞るという点は賛成だが、今までの研究で、学校支援・放課後等支援・家庭教育支援など具体的な実践例をまとめてきている。また、現代的な課題を追うことも大切だが、その背後には学びを通じた地域づくりが大切であるという揺るぎないものがあり、その分野の研究は一貫して続けてきているところだ。今回は、今まで十分検討してこなかった「大人と子どもの出番づくり」の面を研究していく案を事務局からいただいたと考えている。

委員 学校支援・放課後等支援・家庭教育支援の3つの連携以外の視点も包括して研究してほしい。

委員 では、対象など今後の検討の余地を残しつつ、岡山県として今以上に子どもが社会に入りやすくする状況をどう作っていくかを研究していくこととよろしいか。今後は専門部会員を議長が選任して、研究を進めていくこととする。

(2) 社会教育団体への支援の在り方について

委員 親が学ぶのはPTAの場である。PTAが親学のプログラムも開発して進めてほしい。

また、現場の教師が現場の声を汲んで自ら提議するぐらいかかわってもいいと考える。

委員 単位PTAでも、郡市PTAでも、県PTAでも研修会を行っている。スマホについても研修を深めているところ。今年度は中国ブロックの研究大会も玉野市で開催される。

(3) その他

特になし

6 その他

今後の会議日程について

7 閉会